




# 生物・生態サイトカード

通しNo.		B-6		更新日	2025/3/19
サイト名		冬の使者コハクチョウ渡来地			
基本情報	区分	<input checked="" type="checkbox"/> 動物 <input type="checkbox"/> 植物			
	生息地	島根県松江市・出雲市・安来市・鳥取県米子市・境港市(宍道湖・中海・出雲平野・能義平野)			
	分類				
	管理団体／保護団体／モニタリング				
	留意点	コハクチョウ:しまねレッドデータブック(準絶滅危惧)			
サイトの解説	生物・生態	<p>ハクチョウ類は、大昔から宍道湖一帯に渡来していたことが知られており、神話や出雲国風土記にもその存在が記されている。</p> <p>宍道湖に渡来するハクチョウ類は、餌としていた水草類の消滅などにより一時期ほとんど姿を見せなくなったが、現在では宍道湖に300～500羽、能義平野と中海に1,000～1,600羽が安定して渡来するようになった。なお、宍道湖・中海低地帯に渡来するハクチョウ類の大半はコハクチョウで、オオハクチョウは稀にしか渡来しない。</p> <p>コハクチョウは、シベリア北部のツンドラ地帯で繁殖し、冬季に日本列島などに渡ってくる。シベリア南部のタイガ地帯を主な繁殖地とするオオハクチョウと比較すると、より北のツンドラ地帯から宍道湖・中海まで、数千kmに及ぶ飛行を続け渡来する。これは、コハクチョウの優れた飛行能力やオオハクチョウとの棲み分け争いの結果と考えられている。</p> <p>宍道湖は、日本列島におけるコハクチョウの南限の集団越冬地であり、学術的にも注目されている。コハクチョウの渡来コースについては、これまで行われてきた標識調査などから日本列島に沿って南下するコースが知られていたが、電波発信機を使った調査により、最近になって日本海を直接横断するコースもあることが分かってきた。</p> <p>宍道湖や中海に渡来するコハクチョウは、斐伊川河口部の中州や能義平野の水を張った水田などをねぐらとしており、出雲平野や能義平野の広大な水田を餌場としている。この他、近年松江市の市街地から約4kmにある宍道湖と成因を同じくする潟の内一帯の水田にも150羽ほどの群れが毎年渡来するようになり、市民の目を楽しませている。</p>			
	地形・地質、歴史・文化等	<p>斐伊川水系の下流部の出雲平野と宍道湖・中海を含む湖岸域は、375km<sup>2</sup>の広大な面積を占め、豊かな食餌に恵まれ、渡り鳥には好適な環境となっている。このような低地帯の形成は、新第三紀における島根半島の形成と第四紀の海面水位の昇降がもたらした2段階の地殻変動の結果であった。</p>			
写真・図等		<div></div> <div>潟の内に渡来したコハクチョウ      飛び立つコハクチョウ(斐伊川河口)</div>			
参考文献		<p>佐藤仁志(2015) 松江市史 通史編1自然環境・原始・古代(松江市史編集委員会): 136-138. 松江市.</p> <p>佐藤仁志編(1985) 宍道湖の自然. 山陰中央新報社.</p> <p>建設省中国地方整備局出雲工事事務所監修(1997) 斐伊川水系の鳥類. 社団法人中国建設弘済会. 70-71.</p>			